九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「資料」という語について

舒，志田
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9364

出版情報：語文研究. 90, pp.9-22, 2000-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「資料」という語について

舒　　志田

一　はじめに

現代日本語においては、「資料」という語はかなり多くの分野にわたって使用されている。『現代語の語彙調査—総合雑誌の用語』（国立国語研究所報告 13、1958 年）によると、「資料」の使用率は 0.065‰、使用率順は 2087.5（4,200 語のうち）である。『電子計算機による国語研究Ⅲ　新聞基幹語彙』（同報告 39、1971 年）では、「資料」を「かなり幅が広く、深さ中位のもの」としている。また、『小学校国語教科書における漢語調査—語彙を中心として—』（横浜市立教育研究所研究紀要 4 集、1955 年）によると、「資料」は合計 5 回、小学校国語教科書（四〜六年）に現れているので、基本学習語彙としての一面をも窺わせている。このように、「資料」という語はわれわれの日常の言語生活にかなり浸透しているように思われるが、その素性については意外にあまり知られていない。

二　「資料」に関する先行考察

「資料」を個別に取り上げた語誌的な考察はまだない。

「資料」は、漢語大詞典や大漢和にはともに古い典拠が見えず、日本国語大辞典に挙げた例は明治以後のものである。

【資料】　もと。したぢ。原料。材料。　（大漢和・巻十、753 頁）

【資料】①それを使って何かをするための材料。特に、研究や調査などのもとになる材料。もと。『日本開化小史・四・八』「鎌倉時代の諸書中にも智恵を進むるの資料に至りては殆ど之を欠くと雖も」〈中略〉②資金。もとで。〈下略〉　（日本国語大辞典）

佐藤亨氏は『近世語彙の研究』（桜楓社、1983）の中で、「資料」という語について、「漢籍に典拠があるかわからず、本邦では『輿地誌略』以降に用例が存する語」と指摘しているが、（同書 pp284, 288）、これ以上詳しく考察は行われていないし、その指摘自体にも問題点がある。

惣郷正明・飛田良文編の『明治のことば辞典』では、「資料」について次のように述べている。

明治時代から一般化した語。明治六年刊の『附音挿図英和字彙』には *com-*

pensation の訳語として「資料」とあり、給料の意味であるから「資粮」の誤りかと思われる。明治後期には *material* の訳語となっている。田口卯吉『日本開化小史』(明治 10〜15) 巻四・第八章には「鎌倉時代の諸書中にも智恵を進むるの資料に至りては殆ど之を欠くと雖も」とある。

しかし、「資料」が和製か中国製かについて特に言及していない。

実は、「資料」は近世の中国洋学資料の一つである『西学凡』(イタリア人の宣教師艾儒略著、1623 年刊) に既に見える語である。

1) 其議論之法、大約必由五端。一先観物観事観人観時勢、而習覓道理以相質、所謂種種議論之資料是也。二□乎先後布置有序而不紊。三以古語擷華潤色。四将所成議論、嫻習成誦黙識心胸。其人霊悟善記、則有温養之法、其人善忘難記、則有習記之法。終至公所主試者之前誦説之、或登高座、与諸智者辯論焉。

／其議論ノ法大約五端ニ由ル。一ニハ観物観事観時勢ヲ先ンシテ、習ヒ覓メ道理以テ相質ス、所謂ル種々議論ノ資科是ナリ。二ニハ先後布置序デ有テ紊レザルコトヲ貴フ。三ニハ古語ヲ以テ擷華潤色ス。四ニハ成ス所ノ議論ヲ以テ嫻習シ誦ヲ成シテ心胸ニ黙識ス。其人霊悟テ善記スルトキハ温養ノ法有リ、其人善ク忘テ記シ難キトキハ習記ノ法有リ。五ニハ公所主試者ノ前ニ至テ誦説シ、或ハ高座ニ登テ諸智者ト辯論ス。

(九大写本・一ゥ〜二オ／訓釈は九大蔵「天学初函大意書」による。)

この部分に対する日本人の理解は、付記した天学初函大意書にある訳文から伺えるが、これを見る限り、例 1) での「資料」という語は、現代日本語のそれとほぼ同じと思われる。佐藤氏は『西学凡』の語彙についても考察されたことがあるが、(注1) 但し、同論考では「資料」という語についての言及はなかった。勿論、本稿の目的は単にこういった見落としなどを指摘するに留まるようなものではない。実は、「資料」という語は、近代翻訳語彙の形成を考察する際に好個の例ではないかと思っているので、ここで取り上げる次第である。

「資料」の日本側の早い用例で、佐藤氏が指摘された『輿地誌略』にあるものは下記の通りである。

2) 諸邦ノ言語学術ヲ教習セシメ、童幼ニ資料ヲ給フ。　(巻一・魯西亜)

意味的には、現代語の「資料」と違っている。ここでの意味は日本国語大辞典に掲示された意味②と解される。但し、この意味での「資料」は中国語にはない。

【資料】①生産、生活するための必須の物。例：生産資料；生活資料。②根拠とする材料。魯迅《墳・写在墳後面》"或者也須在旧文中取得若干資料，以供使役。" 趙樹理《実幹家潘永福》"我対他生平的事蹟聴得很多，早就想給他写一篇伝記，可是資料不全。"　(漢語大詞典)

漢語大詞典の示した中国語の「資料」の意味は二つとも日本国語大辞典に挙げた

①の意味に解されると思われる。以下、叙述の便のために、日本国語大辞典に挙げた意味①と意味②での「資料」をそれぞれ「資料1」と「資料2」とする。『西学凡』の用例及び日本国語大辞典などで挙げられた『日本開化小史』における用例はともに「資料1」であるのに対して、『輿地誌略』にある用例は「資料2」である。

そこで問題点は、

第一、『西学凡』における「資料1」は造語の観点から見て如何にして形成されたのか。

第二、『輿地誌略』にある「資料2」は上の「資料1」の意味変化の結果なのか、それともそれと関係なく成立したものか。

第三、同じ意味での『西学凡』の用例と『日本開化小史』などの用例との間に接点があるかどうか。

第四、「資料1」は如何にして一般用語化したのか？

というところにあるかと思われる。以下、それぞれについて検討して行きたい。

三 「資料」という語の形成

上述の如く、「資料」は近世中国洋学資料の一つである『西学凡』に見える語であるが、しかし、造語の観点から見る時、それが如何にして作り出されたのかを考える必要がある。そこで、まず、「資」の字義について見る必要があるかと思う。

「資」の元来の字義は『説文解字』によると、財物のことである。

資　　貨也従貝次声　　（説文解字）

それからいろいろ派生的な意味を生み出した。漢語大詞典などによると、二十種以上もある。①貨物、銭財；②指粮食；③頼以生活的来源；④蓄積、蓄蔵；⑤資助、供給；⑥凭借、依靠；⑦販売；⑧取用、求取、利用；⑨具有、具備；⑩稟賦、才質；⑪材料、資料；⑫門第、声望、閲歴；⑬官職、職位；⑭減；⑮時；⑯鋒利；⑰資方、資本家、資産階級的簡称；⑱「齎」と同じ。送；⑲粗布；⑳賦税；㉑通咨；㉒通至；㉓通茨；㉔水名；㉕古州名；㉖姓。

このうち、⑥、⑧及び⑪は、例1）の「資料」に見られるものと思われる。⑥⑧の字義で理解する場合、「資料」は「所資之料」、即ち「資するところの材料」の意味である。語構成的には、「V＋N」といった修飾構造型の二字漢語である。これと似た構造を有する「～料」の熟語として、外に、「食料」「飲料」などがある。⑪の字義で考える場合、「資料」は「N＋N」といった並立構造型の二字漢語となる。「材料」「物料」などはこれと似ている。

それでは、「資」一字で資料・材料の意味を表す場合、どのように使われているかを、調べて見よう。

3）雖不能興言高詠、銜杯引満、語田里所行、故以為撫掌之資、其為得意、

可勝言耶？　（晋・王羲之・与吏部郎謝万書／漢語大）

4）田横巨擘自、猶為談者資。　（金・元好問・学東坡移居詩之六／漢語大）

5）以次録之、既足当歴史上之記念、亦新聞記者自警之資也。（姚公鶴・上海閑話／漢語大）

以上は漢語大詞典に示された三例であるが、例3)、例4）における「資」はいずれも、話題または談笑のネタという意味合いである。日本語ではいわば話のクサである。例えば、干河岸貫一の著である『日本立志編』（明治12）には「笑資（わらいぐさ）」とある。

6）人伝テ以テ笑資（ワラヒグサ）ト為ス。　（巻二・第廿六）

ヘボン（*J. C. Hepburn*）の『和英語林集成』（再版、1872）に *material* の訳に *kusa* を宛てたのも納得できる。

MATERIALS, n. shina; ji; jiai（初版、1867）

MATERIALS, n. shina; ji; jiai, ryo, kusa.（再版）

そして、例5）の場合は、参考や助けの意と理解して良かろうと思われる。例5）自体は近代のものではあるが、この意味での「資」は以前から用いられている。

7）今択其器編十種可資測算者別著　（天学初函・序）

8）故備録諸説、以資博考　（近藤正斎全集3、pp238）

9）故ニ今四庫全書総目ニ出ル所ヲ左ニ附載シテ検閲ノ資トシ又以テ清朝ノ去取ヲ見ト云　（同上、pp219）

いずれにしても、例1）の「所謂種種議論之資料也」といったところを、単に「所謂種種議論之資也」と、「資」一字でもその文意を表わせないわけでもないが、そこであえて「資料」と二文字を使った理由は、一つは、やはりここで言う「議論」という行為を単なる軽軽しい談笑から一線を画したいという著者の意図があったのではないかと考えられる。もう一つは、これを単に構文上からの必要であると解釈したいところであるが、それを立証するには「並立構造型」の語とその構成因子との、それぞれの使用状況をデータ的に分析しなければならない。本稿ではまだその用意がないので、今後の課題にしたい。

次に、「資料」と類義語関係にある「資材」と「材料」について見て行きたい。「資材」は古くは「資格、才能、資性」などの意味で使われていた。しかし、「資料や材料」の意味で使われるようになったのは割に新しく、漢語大詞典の示した早い例は魯迅（1881～1936）の用例である。

10）疾名実之散乱，因資材之所長，為守白之論，仮物取譬，以守白辯。
（公孫龍子・迹府）

11）功用随日新，資材（＝資性）本天授
（唐・白居易・和微之詩-和《寄問劉白》）

12）伏念某門第至寒，資材（＝才能）甚浅，宦途蕞品，儒館陳人。

（宋・文同・謝中書啓）

13）挙工業之械具資材（＝物資器材），植物之滋殖繁養，動物之蓄牧改良，無不蒙科学之澤。（魯迅・墳・科学史教篇）

14）又元人雑劇屡取《水滸》故事為資材（＝資料、材料）。

（魯迅・中国小説史略・第十五篇）

—以上5例は漢語大詞典による、下線・括弧内の注は筆者による—

一方、「材料」は古くから漢籍に用いられた語である。また、後述でわかるように、英華辞書類では早くから *material* の訳語の一つとして、「材料」が宛てられていた。

15）一面置場和買材料焼造磚瓦。（宋・蘇軾・乞降度牒修定州禁軍営房状）

16）山容瘦，木葉彫。対西窓尽是詩材料。

（元・張可久・慶東原-次馬致遠先輩韻）

—以上2例は漢語大詞典による—

従って、例1）の「種種議論之資料」のところを、「種種議論之材料」と、言いかえてもよさそうであるが、「種種議論之資料」の場合は、「いろいろな議論の参考材料」という意味であるのに対して、「種種議論之材料」はあくまでも「いろいろ議論の材料」そのもので、いわば議論の素材・題材ということになる。これは、例1）における著者の述べようとするところの主旨とは一致していない。勿論、「材料」を参考資料という意味で、現在では用いられてもいる。しかし、漢籍古典には管見の限り、このような使い方はない。むしろ、近代になって *material* の訳語として用いられた結果、「材料」という語自身に意味変化が起きたと考えるほうが自然である。現に、漢語大詞典に掲示した参考資料という意味での「材料」の例は毛沢東（1893～1976）の用例である。

17）所以印這個材料、是為了幇助同志們找一個研究問題的方法。

（毛沢東・農村調査的序言和跋）

四　「資料」と「資糧」

ところで、例2）に見られる日本側の「資料2」は、どのようにして形成したのか。少なくともこれが上述の「資料1」の意味変化の結果とは考えられにくい。というのは、われわれは、例2）における「てあて」の意の「資料」と、例1）における資たる材料の意の「資料」との間に関連性を看取し得ないからである。「料理」「愛人」「組織」などの例に見られるように、漢語の意味変化には常にある種の関連性が認められている。「神経」の如く、前後の二つの語形の間に意味的なつながりが確認されにくい場合、むしろ、後者を新造語と認めたほうが一般的である。(注2) とすれば、「資料2」を日本側の独自の造語と認めざるを得ない。いつ頃できたのかまだ言い切れないが、少なくとも明治以前の文献における「資料」の用例

は、今のところ確認されていない。それはともかく、ここで「資料2」の出現のきっかけを少し考えたい。

一つは、「資糧」からの何らかの変化の結果であると考えられる。

「資糧」は典拠のある語で、日中両国の文献にともに使用の事実が確認されている。時に「資粮」と表記されたこともある。意味は、粮食または金銭のこと、転じて仏教語では功徳の意にもなる。

18）若出于陳鄭之間、共其資糧扉履其可也

（春秋左伝・僖公四年／漢語大より）

19）遂偕魯生並范理事至県署、主人具酒辞固留、酒罷至出張所、館西式、頗広敞、因謝其意並告以資糧服屐皆我自供、定日移寓。（使東述略）

20）若駕船破損、亦無資粮者、量加修理、給粮発遣

（三代格・一八・宝亀五年五月一七日・太政官符／日国大）

21）タトヒ一期安穏ニタモツトイヘトモ、中有ノ資糧トモナラス、冥途ノ伴侶トモナラス（沙石集・四）

但し、「資料」は、『明治のことば辞典』で述べたような単なる「資粮」の誤まりとは思われない。『附音挿図英和字彙』以後の多くの翻訳辞書に、「てあて」の意の「資料」が採録されていることから見ても、これは誤まりというよりも、むしろ意図的に作り出された語ではないかと思われる。

22）附音挿図英和字彙（柴田昌吉・子安峻編、日就社、1873）

MATERIALS, n. 物、料、実質、物質。*building materials* 材料

Compensation, n, 賠償（ツグナヒ）、報酬（ムクヒ）、資料（テアテ）

23）英和双解字典（棚橋一郎訳、丸善商社蔵版、1886）

Materials. What anything is made of 実質、実体

Compensation 賠償（ツグナヒ）、資料（テアテ）、報酬（ハウシウ）

24）袖珍挿図和訳英辞書（長谷川辰三郎、1886）

Material. n. 物、料、実質、物質 *Building materials* 材料

Compensation 賠償、報酬、資料

25）漢英対照いろは辞典（高橋五郎、1887）

しれう（名）資料、てあて。*Money for doing anything.*

26）英訳漢語辞典（*J. H. Gubbins. 1889*）

SHI 資 *To take, rely on; depend opon; help; means of help; ground of dependence; proterty; riches; valuables; necessaries; to employ; disposition.*

Shi-ryo | 料, *see Niu-hi*

NIU 入 *Niu-hi* | 費, *expenses; cost; outlar.*

また、明治期の漢語辞書類において、殆ど、「資料」を「シレウ」と、「資糧（ま

—付表1—：明治期漢語辞書における「資料」

刊年	辞書名	表記	読み	語釈	巻数	個所
1874	日本外史国史略字類	資糧	シリャウ	モトデノヒャウラウ	64	433/140ォ
1874	外史訳語・下	資糧	シリョウ	資者給済之謂 モトデノヒャウラウ	63	364/47ゥ
1874/12	大増補漢語解大全・下	資料	シレウ	イリヨウ	13	263/376ォ
1876/2	新撰漢語字林大成	資糧	シリャウ	ヒャウラウ	22	240/140ゥ
1876/4	初学必携大全漢語字書	資料	シレウ	イリヨウ	23	453/160ォ
1876/6	荘原和漢語字類	資粮 資糧	シリャウ	モトデノヒャウラウ	27	326/140ゥ
1876/9	画引新撰漢語字引大全	資料	シレウ	イリヨウ	26	280/268ゥ
1876/9	読書自在	資料	シレウ	イリヨウ	29	193/189ォ
1877/4	改正増字画引漢語字典	資糧	シリャウ	モトデノヒャウロウ	32	163/147ゥ
1878/11	訓釈考訂音画両引明治伊呂波節用大全	資粮 資糧	シロウ シレウ	モトデノヘウロウ 仝シコト	35	461/201ォ
1884/8	新撰普通漢語字引大全	資糧	シリャウ	モトデノヒャウロウ	43	161/147ゥ
1885/9	雅俗漢語字引大全	資料	シレウ	イリヨウ	43	345/136ォ
1901/12	漢語故諺熟語大字林・下	資糧 資料	シリャウ シレウ	カテ。＝ヒャウラウ 材料	54	248/1146
1904/2	新編漢語辞林・下	資糧 資料	シリャウ シレウ	カテ。＝ヒャウラウ モトトスルタネ	57	298/1268
1906/1	作文新辞典	資料	シレウ	もとで。材料	60	149/133

【傍注】：表中における巻数は『明治期漢語辞書大系』の巻数で、個所は当該巻におけるページ数／当該辞書における丁数またはページ数である。

たは資粮)」を「シリャウ」というふうに音表記の上で区別していること、それに語釈も違っていることなどの点から察すれば、一層その意図性が強まってくる。

ここで、一つ手がかりになるのは、「食糧」と「食料」との関係である。「食糧」、「食料」はともに漢籍にある語であり、前者は食べ物、粮食の意味で、後者は食べ物の原材料の意味である。

27) 月月食糧車轆轆、一日官軍収海服　(唐・元稹・田家詞)

28) 其中人功、食料、錫炭、鉛沙、縦復私営、不能自潤。(魏書・高道穆伝)

29) 対馬嶋司、例給年粮、秩満之日、頓停常粮、比還本貫、食粮交絶　(続日本紀)

30) 祝三人起正月一日尽七月卅日、合二百卅七箇日食料、二百八十四束四把人別二把　(正倉院文書・天平二年・大倭国正税帳)

しかし、後に日本側において、「食料」のほうは意味変化が生じ、「食べ物の原材料」から「食べ物」そのもの、または、「食費、食事代」の意味にも使われるようになった。

31）私事ハ此山内に数年住馴れし古狐で御座い升が他の狐狸とハ違ひ人間の所有せる喰物抔を盗み喰ふ事ハ一切ありませんが故朝暮の喰料（＝食物）も不足がちて誠に難渋いたします。

（郵便報知新聞／明治8年10月7日・府下雑報）

32）其縣へ鑑札（かんさつ）を願わねバ渡世も出来難（かた）く案（あん）に相違の事計りにて座敷もなく大勢の喰料（しょくりょう）（＝食物）にも差支へ甚だ難渋に及び

（郵便報知新聞／明治8年10月8日・府下雑報）

33）生徒若し入塾を欲せハ別に食料（＝食事代）を出して入るを許す

（郵便報知新聞／明治8年10月6日・広告）

その結果、「食（喰）料」と「食糧」との意味が一部重なることになり、「食料」を「食糧」の略体化した形であるかのように思わせがちになったのではないか。その類推で「資糧」から「資料」が作り出されたのではなかろうかと思われる。

もう一つは、これを「祭資料」ということばからできた語とも考えられる。「～料」というのは、もともと「～のしな」の意味で、「材料」「原料」などが其の類である。しかし、後に「～代金」の意味にもこの「料」が使われるようになった。特に日本側においてこの類の使い方が多いのである。例えば、明治初期の新聞類を捲ると、「扶助料」「辯営料」「馬養料」「養育料」「祭儀料」「祭粢料」「授業料」「手数料」「保険料」「船料」など、この種の複合語が数多く見える。従来、漢籍ではこの意味を表すのに「～資」を用いるのが普通である。「酒資」「祭資」などがそれである。それが次第に上述のような「～料」に取って代わられ、勢いで終に「祭資料」などといった言い方も出てきた。

34）新編漢語辞林・下

祭資料サイシレウ　マツリノニフヒ

そこから「資料」という語が生まれたという可能性もある。但し、ここで挙げた『新編漢語辞林』(1904) の例は年代的には『與地誌略』よりかなり後のものであり、それ自体例証にはならないが、一つの可能性だけ提示してくれていると思われる。

五　日本における「資料1」の定着

『西学凡』以後、十九世紀後半までの中国側の文献には「資料1」は殆ど姿を見せない。一方、日本においては、先述の九大蔵『天学初函大意書』では「資科」となっている。これは転写の誤りかと思われるが、逆に、「資料」という新語に馴染んでいないからこそ、このような誤記が起きたのではないかとも考えられる。勿論、もともと、「料」の字と「科」の字は僅か一、二画の差で、書写または印字の際に混同しやすいと言えば混同しやすいものである。其の傍証の一つとして、例えば、明治8年10月7日の『郵便報知新聞』の広告欄に掲載した『丹氏医療大

成』という本の広告文に、「内科」を「内料」と誤記していることがある。

35）原書ハ英国の大医丹寧児氏か二十余年間の丹精を費したる内料全備の経験書なり。

さて、いわゆる蘭学資料に目を向けても「資料1」は見出せない。

36）訳鍵

MA Teriaalen.　物ヲ作ル素質

MA Terie.　物、毒、膿

「資料1」が再び人の目にかかるようになったのは、凡そ明治十年代あたりからである。既に指摘された田口卯吉の『日本開化小史』における用例のほか、『郵便報知新聞』や『日本立志編』などにも用例を確認することができる。

37）されば鎌倉時代の諸書中にも、智恵を進むるの資料に至りては、殆ど之を欠くと雖も、情を動かすの趣向に至りては、既に大いに文章上に現われたり、その所謂進歩なるものも、実に想像の増進に外ならざるなり。

（田口卯吉・日本開化小史・第八章）

38）幸ニ君ノ棄ル所ナラズ続両越州論ヲ著シ余輩ヲシテ参考ノ資料ヲ得セシメタルハ意外ノ大幸ト謂フベキナリ

（大江直・読続両越州論・明治11/6/26郵便報知新聞社説）

39）夫レ人ハ其心ヲ娯マシムルコト無キ能ハズ、詩歌書画ヲ学ブカ如キハ、心ヲ娯マシムルノ資料ニシテ、但軽重本末ヲ失ハザレバ、其益多シ、況ヤ学術徳行ノ身ヲ立テ家ヲ興スベキ者ニ於テヲヤ。

（日本立志編・巻三・第四）

40）諸君よ、前編に掲載したりし数表を参照する時は稍々以て古来我国に発現せし人為現像の沿革を概察するの資料を得べきなり、故に、余は今ま此事実に拠りて先づ卑見を開陳し江湖識者の教を請はん。

（田口卯吉・日本開化之性質・第三章／明治18年9月経済雑誌社刊）

但し、例39）における「資料」は明治15年の『日本立志編字引』によると、「タスケ」と訓まれたらしい。

『日本開化小史』活字本第一巻（第一・第二章を収む）は明治10年9月の刊行であるが、同じく活字本の第四巻（第七・第八章を収む）は、明治12年10月30日発行の『東京経済雑誌』第十三号にこの第四巻の発行広告文が載せていることから、明治12年10月の刊行と推測される。従って、上記4例のうち、年代的には大江直の用例が一番早い。しかし、これらの用例と『西学凡』のそれとの間にどのような接点があるのか、今のところ尚突き止め難い。田口卯吉は、明治4年上京して翌5年に大蔵省翻訳局の上等生徒となって経済学に転じまた同じ頃に開化史（*History of civilization*）をも研究したという。このことから、彼の用例は、翻訳辞書に由来したものではないかと考えたくなるが、それまでの翻訳辞書類を調

べてみたが、まだ「資料1」は出てこない。

華英・英華辞書類

41）華英字典（*R. Morrison. 1815–23 Macao*）
MATERIALS, of which anything is made. 材料. *Materials* (*for porcelain*) 質料

42）英華辞典（*W. H. Medhurst. 1847–8* 上海 *Mission Press*）
MATERIALS, 材料、材質、材木、料物、

43）英華字典（*W. Lobscheid. 1866–9*、*HONGKONG*）
MATERIALS, 物、物質、物体、材料、材質、材木、料物

44）*Kwong-ki-chiu.* 華英字典（1879、申報館申昌書館）
MATERIALS, 材料、材質

45）英華和訳字典（津日仙・柳沢信大・大井鎌吉訳、中村敬宇校、1876）
MATERIALS. n. pl. as: writing materials 文房四宝。*building materials* 材料。ザイモク、キシナ。

和英・英和辞書類

46）英和対訳袖珍辞書（堀達之助等編、文久2年初版、慶応2年改訂増補版）
MATERIALS. s. pl. 物ヲ造リ立ル実体

47）平文 *J. C. Hepburn.* 和英語林集成
MATERIALS, n. shina; ji; jiai（初版、慶応3年〔1867〕）
MATERIALS, n. shina; ji; jiai, ryo, kusa.
SHIRYO. シレウ支料 *shitaku kinmoney of funds used in public service.* （再版、1872）

48）浅解英和辞林（蔵田氏新鐫、1871）
MATERIALS, n. シナ、ヂ、ヂアヒ

49）大正増補和訳英辞林（前田正穀・高橋良昭、東京弦巻氏蔵版、1871）
MATERIALS. n. 物ヲ造リ立ル実体

50）英和辞典（吉田賢輔、知新館蔵版、1872）
MATERIALS, n. 物ノ頼ッテ造ラル本質○材料

51）改正増補和訳英辞典（天野芳次郎蔵版、1873）
MATERIALS. n. 物ヲ造リ立ル実体

52）英和掌中字典（青木輔清、有馬私学校蔵版、1873）
MATERIALS. n. モノノヨッテツクラレルモトノモノ

53）附音挿図英和字彙（柴田昌吉・子安峻編、日就社、1873）
MATERIALS, n. 物、料、実質、物質。*building materials* 材料

この一語の訳をとって見ても、明治初期の翻訳辞書における訳語の四つの系譜を明かに看取できる。即ち、

（イ）袖珍辞書の和訳系：30)、33)、35)、36)

（ロ）ヘボンの和訳系：31)、32)

（ハ）華英・英華辞書の漢訳系：37)

（ニ）イとハの折衷系：34)

さて、本題に戻るが、翻訳辞書類で「資料1」が姿を見せたのは、井上哲郎らの『哲学字彙』である。但し、それは、*material* の本項目の訳にあらず、*fallacy* の小項目 *Material fallacy* の訳に現れたのである。

54）哲学字彙（井上哲郎編、1881）

Fallacy　虚偽

Fallacy of accident　偶有虚偽

Logical fallacy　論体虚偽

Material fallacy　資料虚偽

Pure logical fallacy　純粋論体虚偽

Semi-logical fallacy　一半論体虚偽

cf：*Material.*　材料、有体

Material cause　材料原因

ここで注目したいのは、やはり「資料」という語が論理学に関することばの訳に現れたことである。これは『西学凡』における「資料」の置かれた場面と非常に似ているのに気がつくだろう。但し、田口卯吉、大江直らの用例と同様、これを直ちに『西学凡』に由来するものと断ずるにはまだ確証を得ていない。

ところが、この『哲学字彙』における「資料」という訳語は、同時期の辞書の中においては、むしろ一つ孤立的な存在である。実は、『哲学字彙』上梓の前後、即ち1880年代に出回った辞書類を調べて見たが、いずれも同じ意味での「資料」は出てこなかったのである。この事実は、少なくとも1880年代までには「資料1」がまだそれほど定着していないことを物語っている。大槻文彦の『言海』（明治22～24年）にも、勿論、「資料」はまだ収録されていない。

55）明治英和字典（尺振八訳、六合館蔵版、1884年）

Material（名）　材料、道具○物、物質

56）英和袖珍字彙（*TSUYUKI SEIICHI*、四書房合梓、1884）

Materials　モノヲツクルルモトノモノ

Marerial. a. Building materials.　キシナ

57）附音挿畫英和玉篇（入江依徳訳、東京鶴声社、1885）

Material. n.　実質、成分

58）学校用英和字典（小山篤叙纂訳、1885）

Material（名）　物質、料、物、実質

59）明治新撰和訳英辞林（傍木哲三郎纂訳、細川氏蔵版、1885）

MATERIALS, n. 物ノ料、実質、物質。*Building materials* 材料（キシナ）

60）英和対訳大辞彙（前田元敏訳述、大阪同志社、1885）

MATERIALS, n. 物、料、実質、物質。*Building materials* 材料（キシナ）

61）英和和英字彙大全（市川義天喜訳、1885）

MATERIALS. a. or n. 形アル、体アル、実質ノ、緊要ナル；物、材料、実質、物質。*building materials* 建築ノ材料。*writing materials.* 著書ノ材料。

62）新撰初学英和辞典（永井尚行編、明治 1885）

MATERIALS. 物、実物、財料（著述等）

63）和訳英文熟語叢（斎藤恒太郎編、攻玉社蔵版、1886）

MATERIAL, n. Building materials 材料、材質、材木、料物

64）英和字海（棚橋一郎、鈴木重陽、文学社、1887）

Material, s. 材料、物質、実質

65）英和小辞彙（豊田千速編訳、京阪五書館、1888 年）

Material, s. 物ヲ造リ立ル実体

66）懐中英和新字典（吉田直太郎等訳、東京富山房、1888）

MATERIAL, a. 物質、物料、実質 *Building materials* 材料。—*n.* 物実、実体、物

67）双解英和大辞典（島田豊編、共益商社書店、1892）

Material, Substance of whicn anything is or may be made. 材料、原料、有体

中には、『英和和英字彙大全』、『新撰初学英和辞典』の如く、「著書などの材料」と新たに、「資料 1」にかなり近い語釈を加えたものもある。

Material の訳語としての「資料」が再び登場するようになったのは、『哲学字彙』より 15 年後に出た『和英大辞典』である。

68）*C. F. Brinkley.* 和英大辞典（三省堂、1896）

Shiryo. しれう、支料 *n.* [*Chin*] *Same as shitakukin*

Shiryo. n. しれう、資料 [*Chin*] *Materials* (*as for compilation*) *Resource; means; fund. Syn. TEATE*

勿論、それまでの間に「資料」がいろいろジャンルの文献に現れるようになった。また、「○○資料」と題する文献も編纂されるようになった。例えば、*Webcat*（国立情報学研究所）で「資料」をキーワードに年次ごとに検索したところ、1900 年までに次のようなものがある。

このうち、『日本教育史資料』は特筆すべきものである。明治十六年（1883）に文

—付表2—：

刊行年	文　献　名	編　集　者	出 版 者
1890	日本教育史資料	文部省総務局	
1892	祝日大祭日演義資料	国家教育社	明治館
1893-99	商業資料		
1896	古老遺筆：講史資料	講史会	松栄堂
1896	職工工場保護及取締ニ関スル参考資料	農商務省商工局	
1896	動詞教授資料	台湾総督府民政局学務部	
1899	国民教育資料	峰是三郎	同文館
1899	最近修身教材資料	斎藤斐章	同文館
1900	国文学資料	片岡潜夫	田中宋栄堂
1900	国際公法講義録：将校教育資料	有貫長雄	海軍教育部
1900	検査資料	会計検査院	

部省が教育沿革史の編纂をはかり、藤井善言を日本教育史資料調査委員に任命し、資料取調掛を配置し、各府県に資料の蒐集を命じた。

明治十六年報告局ニ命スルニ本邦教育史編纂ノ事ヲ以テシ先ツ資料ノ蒐集ニ著手セシメ同年二月各府県ニ達シ府県庁及ヒ学校等所蔵ノ旧記其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リテ学制頒布前ニ係ル学事ノ諸項ヲ調査セシメ又諸官衙及ヒ旧藩主等ニ照会シ其貯蔵ノ旧記ヲ借覧スルヲ約シ苟モ古来我カ邦ノ教育ニ係ル書ハ細大択ハス之ヲ蒐集シ以テ此編纂ノ資料ニ供セントセリ

（日本教育史資料・巻一・緒言）

八年かけて終に25巻の巨編を完結させた。幕末・明治期の教育実態を知る上では今でも貴重な資料であるが、その内容について本題と関わりないのでここでは触れないことにする。しかし、この日本教育史資料の編纂事業が「資料」という語の定着に大きく寄与したのではないかと思われる。文部省より各府県への布達には「資料」ということばがあるので、それまで「資料」という語を知らない人も嫌でもそれを目にすることになったのだろう。

第一号　　府県

今般当省ニ於テ教育沿革史編纂候ニ付府県及学校所蔵ノ旧記類其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リ学制頒布前ニ係ル左記ノ諸項取調本年八月限可差出此旨相達候事

文部卿福岡孝弟代理

明治十六年二月五日　　大蔵卿松方正義

旧何藩学制沿革取調要目

〈中略〉

右ノ外闔藩学制事上ノ事項ニシテ編史ノ資料及ヒ参考ニ供スベキモノハ之

ヲ蒐録スベシ但旧幕領内ニ係ルモノハ本項ニ依遵シテ調査スベシ

〈中略〉

右ノ外学校ニ関スル旧記学校ノ紀事序文ノ類ニシテ編史ノ資料又ハ参考ニ供スベキモノハ詳悉蒐録スベシ但旧幕府領内等ノ学校モ本項ニ依遵シテ調査スベシ　（出所：日本教育史資料・巻一・参照）

以上を合わせて考えると、「資料1」はほぼ、1890年代に入ってから定着していたのではなかろうかと思われる。そして、やがて、漢語字書類にも収録されるようになり（前記付表1参照）、遂に国語辞書類にも登場するようになった。

69）日本大辞典・言泉（落合直文）

シレウ資料［名］ 主要たる材料。もと。もとで。原料。

六　まとめ

以上をまとめると、次のようになる。

(1) 「資料」は近世中国洋学書の一つである『西学凡』に見える語であり、当時の新造語であろう。その意味は現代語におけるそれとほぼ同じである。

(2) 日本語側の「てあて、入用」の意味の「資料」は上のものとは関係なく成立したものであり、そのきっかけは「～料」の字義変化にあるかと思われる。それは単なる「資糧（資粮）」の誤りではなく、むしろ意図的に作り出された新語である。

(3) 日本語側の「なにかをするための材料」の意味の「資料」は、(1)における「資料」の借用である可能性が高いが、いまだに確証を得ていない。今後更なる考証を期したい。

(4) *material* の訳語として「資料」が登場したのは、辞書類では『哲学字彙』（1881）が早いかと思われるが、このような使い方が一般に定着したのは1890年代に入ってからのことである。文部省によって進められた『日本教育史資料』（1890）の編纂がその定着に大いに寄与したろうと思われる。

なお、中国語側では『西学凡』以降、19世紀末までの間の文献に「資料」の用例を見出すのはなかなか困難である。現代中国語における「資料」は日本からの逆輸入である可能性が高い。これを(3)と会わせて今後の課題としたい。

注1　『近世語彙の研究』第六章―「西学凡」の語彙

2　「神経」は『後漢書』には「不思議な書物」の意味で見える語であるが、日本側の翻訳書『解体新書』に見える「神経」はオランダ語 *zenuw* の意訳で、前者とは関係無く成立したものと考えられている。

（じょ　しでん　九州大学大学院博士後期課程）